令和８年度

入学試験問題

国　　語

２月２日　第１限

仁愛女子高等学校

一　次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

（設問の都合上、文章には改変した箇所がある。なお、字数に制限のある設問の場合、句読点・記号は一字として数えること。）

旅行、飲食、観劇など、ようやく以前の活気が戻ってきた。声を出す行事やスポーツも一時制限されていたが、これも再開された。声を出す行事と言えば、正月コウレイ[a]の宮中行事「歌会始（うたかいはじめ）」「御講書始（ごこうしょはじめ）」がある。前者は独特の長い節回しで、皇族方や入選者の歌が披露[b]され、ニュースでもよく紹介される。

これに対して御講書始がニュースになることはあまりない。これは、明治時代の初めに「御講釈始（ごこうしゃくはじめ）」として開始されたもので、国書、漢書、洋書の三分野から有識者[※1]が天皇に進講（しんこう）[※2]する。

書（文献）の講義であったから「講書」というのであるが、戦後は、その枠組と内容が変更され、人文科学、社会科学、自然科学の三分野から選ばれた三名の学者が自身の研究テーマについて進講し、①必ずしも「書」についての講義とはなっていない。

こうした進講の起源は、古代中国にある。歴代王朝の中には凡庸（ぼんよう）[※3]な皇帝や暴君もいたので、幼少の頃から儒教的（じゅきょう）［　A　］を教育するのが、学者の務めであった。

であるから、取り上げられる書（古典）は、主に儒教文献で、特に帝王学としてふさわしい『書経（しょきょう）』や②『論語』となることが多かった。小生（しょうせい）[※4]の調査によれば、明治・大正時代の御講書始では、『書経』が十二回、『論語』が十一回と断トツである。

『書経』は、古代聖王の言動を記録したもので、儒教経典「五経（ごきょう）」の一つとなっている。日本でも、「昭和」「平成」など元号の出典としても有名である。

『論語』は言うまでもなく、聖人孔子（こうし）とその弟子たちとの言行録で、③「温故知新」「一を聞いて十を知る」「過ぎたるは猶及（なお）ばざるが如（ごと）し」などの名言の宝庫である。

ところが、回数は少ないながら、『詩経』が進講されたこともある。『詩経』はもともと古代中国の周王朝が各地から採集した三千篇もの詩を孔子が三百篇に編集したとの伝承があり、その後、儒教の最重要経典「五経」の一つとなった。

詩は現代風に言えばポエムであり、帝王学とは無縁であるように思われるが、④なぜ御講書始で取り上げられたのだろうか。手がかりになるのは、明代の処世訓※5『呻吟語』※6の次のような言葉であろう。

君子は詩を観て、政を為すの道を知る。

（『呻吟語』治道篇）

（君子は詩を見て、政治の道を知る。）

詩という漢字は、同音の「志」につながり、内にひめた思い、喜び、悲しみ、つらさなどの心情を率直に表明したものとされていた。逆に言えば、単に技巧を凝[c]らしただけのものは詩ではないということである。

だからこそ、周王朝は、わざわざ地方に出向き、民衆の歌う詩を採集して、［B］の判断材料にしたのである。民が王の政治に満足していれば、おのずから楽しく喜びにあふれた詩が歌われ、逆に、王の圧政に苦しんでいれば、つらく悲しい詩が歌われるからである。

そこで※7為政者は詩をよく観察して政治の道を知るのだと『呻吟語』は言うのである。

これこそ、御講書始で詩が取り上げられる理由であろう。進講者は、『詩経』を文学作品として講義したのではない。また芸術鑑賞の材料としたのでもない。

周王朝や孔子が察知したように、その詩の中に、人間の心情と進むべき政治の道が示されているのである。しかもそれは、直言ではない。人は、あまりに声高に指摘されると、かえって反発を覚えたり、しらけてしまったりすることがある。

これに対して詩は、それとなく人を戒め、やさしくなぐさめるという効果がある。

多忙な現代人は、いまさら詩人にはなれないとしても、せめて『詩経』の持つ意義は理解し、［C］の声に耳を澄まして［D］ようにしたいものである。

（湯浅邦弘『中国古典の生かし方』による）

※1　有識者――学問があり、見識が高い人。知識人に同じ。
※2　進講――天皇や身分の高い人に学問を講義すること。
※3　凡庸――平凡でとりえのないこと。
※4　小生――男性が自分をへりくだって言う語。
※5　処世訓――世間と交わってうまく生活していく上で役に立つ教え。
※6　呻吟語――中国の古典籍の一つ。著者は明代の哲学者呂坤（りょこん）。
※7　為政者――政治を行う人物。

問一　二重傍線の部分a「コウレイ」・b「披露」・c「凝」のカタカナは漢字で、漢字はその読みをひらがなで書け。

問二　波線の部分「いまさら」は副詞である。修飾している部分を一文節で抜き出して書け。

問三　［A］に入る言葉として最も適当なものを選び、記号で書け。

ア　政治　　イ　哲学　　ウ　道徳　　エ　儀式

問四　［B］に入る内容を十字程度で書け。

問五　［C］・［D］に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを選び、記号で書け。

ア　C　学者　　D　研究に向き合う
イ　C　他者　　D　道を誤らぬ
ウ　C　古代聖王　　D　言動を見習う
エ　C　孔子やその弟子　　D　教えに忠実である
オ　C　自らの心　　D　我が身を省（かえり）みる

問六　傍線の部分①「必ずしも『書』についての講義とはなっていない」とあるが、何についての講義になっているのか。文章の中の言葉を用いて十字以内で書け。

問七　傍線の部分②「論語」について端的に説明している部分を文章の中から十五字以上、二十字以内で抜き出して書け。

問八　傍線の部分③「温故知新」の意味として最も適当なものを選び、記号で書け。

ア　互いに励まし合い、知識や技術を高め合うこと。

イ　故郷を離れていた者が、立身出世をして華やかに帰郷すること。

ウ　古いやり方にとらわれて、新しい事態に対処しないこと。

エ　昔の事を研究して、新しい知識を見いだすこと。

問九　傍線の部分④「なぜ御講書始で取り上げられたのだろうか」とあるが、その理由を文章の中の言葉を用いて四十字以上、五十字以内で書け。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

（設問の都合上、文章には改変した箇所がある。なお、字数に制限のある設問の場合、句読点・記号は一字として数えること。）

母親の意向で幼い頃からバレエを習ってきた少女アンノは、美しさを重視するバレエ教室のアケミ先生や、食事などの生活面からも徹底してアンノをサポートする母親に思うところがあったが、あふれ出そうになる感情を爆発させないよう抑え込んできた。そして、十二歳の年、アンノは友人たちとともにバレエ教室の発表会に出ることになった。

アケミ先生に割り当てられたのは、四人で踊る演目だった。四人とも①竹のように美しく痩せ、いつもおなかをすかせていた。そして、もうアケミ先生にはあきあきしていた。アンノ、みらい、アヤ、それからモリちゃん。

モリちゃんはずいぶん前から、アンノのいちばん大切な友だちになっていた。そのかわり、もうほくろはない。アケミ先生の命令で、ある日お母さんとイッショ[a]に病院へ行き、大きなほくろをきれいさっぱりとられてしまった。顔をレーザーで焼かれたとモリちゃんは言った。

「だけど、でも、いいほくろだった。あんまりうれしくないかもしれないけど、わたし、モリちゃんのほくろのこと、すごく好きだった」

アンノが言うとモリちゃんは答えた。

「わたしも」

アンノの口は、あいかわらず大きいままだった。

スクールの前にある自動ハンバイ[b]機の前で紙パックのジュースを飲んでいるとき、アンノが三人をサソ[c]い、三人は乗った。友情のあかしに、紙パックから自分の口をつけたストローを引き抜き、右隣のパックに刺した。自分のジュースに刺さったモリちゃんのストローで、アンノはフルーツオレをいきおいよく飲み干した。

音楽が鳴りだし、ふりそそぐ市民ホールのライトの下へ出たとき、アンノは②いままで感じたことのないようなよろこびを感じていた。クロスした手を左右でつないだまま踊る演目だった。四人は白いばねのようにつらなって、ステップを踏みながら舞台の真ん中まで出ていく。

A、そこで凍ったみたいに立ちどまった。その一瞬、アンノの耳には、耳鳴りのような静寂が聞こえた。

舞台に出てしまってから踊りを中断する。それがアンノたちのしかえしの計画だった。

アンノたちはそのまま、③「だるまさんがころんだ」のように動きを止めつづけた。リハーサルではカンペ[d]キにそろっていた複雑なステップも、ひとつもやらなかった。暗い客席がしだいにざわつきはじめるのが舞台の上からでも分かった。アンノたちが動かなくても照明は輝き

つづけ、音楽は鳴りつづけた。アンノはアケミ先生か、もしくはお母さんが舞台の上へ飛び出てくるんじゃないかと思っていたけれど、そうはならなかった。二分すこしの曲が、長い時間をかけて流れ終わるまで、アンノたちはこらえつづけた。誰かが握っている手に力をこめると、握られたほうはかならず握りかえした。

両隣の手が心ぼそくこわばっているのを感じながらも、アンノは④ふしぎな錯覚にとらわれていた。ライトがあたっている。四人で同じ真っ白なチュチュを着て、音楽だって鳴っている。動いていないだけで、わたしたちの体はなにかのポーズをとっている。そして、大勢の人がわたしたちを見つづけている。その視線は、練習通りに踊れたときには向けられたことのない熱気をふくんでいるような気さえした。今日のリハーサルは、人生でいちばんうまく踊れた。そのあと四人はひそひそ声で肩を組んで、約束したのだ。今日は絶対に踊らないぞ。今日だけじゃないよ。もう、二度とバレエなんか踊るもんか。だけど、と舞台の上でアンノは思う。

⑤だけど踊っているかもしれない。

こんなときにばかり、にっくき⑥アケミ先生の言葉が頭にうかぶ——アンノたちを毎日怒鳴りつけ、食べることを禁じ、きらいな子どもやお母さんをいじめ、お金をたくさんとり、モリちゃんのほくろまでとった、にっくき先生のよく言うこと、一瞬を、どれだけ美しく、自分の力をこめられるかにかかっているんです。美しい瞬間はもし訪[e]れたとしてもすぐに消える、だいたい体はいつか消えます、だから自分たちの体を使ってその瞬間をめざすバレエは、瞬間の芸術といわれるんです。［B］瞬間に心をこめなさい。瞬間を大切にできないものには、ほかのなにも大切にできない。瞬間、とアンノは思う。いまがまさにその瞬間で、けれどそれが、たわんだ時間のなかへ引きのばされていく。永遠のなかにいるような気がした。自分たちのシルエットが一体になって、このうえなく美しいかたちを作っているような気がした。

アンノを恍惚[※1こうこつ]から引きもどしたのは暗転[※2]だった。曲が終わったのだ。四人が手をほどいて下手の舞台袖へ戻った瞬間、母親たちの手がのびてきて、たちまち楽屋へ引きこまれた。知らないお母さんまでみんな顔を真っ赤にして、口々にあれこれ言った。それでも四人はまだいくらか興奮に火照[ほて]っていて、へっちゃらだった。［C］、モリちゃんのお母さんだけが、声も出さずに泣いていた。手には花束がにぎられていて、ピンクのチューリップの間には、よく見ると手紙も刺さっていた。出番を終えたモリちゃんに、舞台袖で渡そうと思っていたのだろう。そのことに気がついたとき、アンノは体が⑦さっと冷えていくような気がした。モリちゃんのほうをうかがうと、モリちゃんは怒ったような顔でだまっていた。

（向坂[さきさか]くじら『踊れ、愛より痛いほうへ』による）

※1　恍惚 ―― 我を忘れてうっとりとすること。心奪われて夢中になるような状態。
※2　暗転 ―― 舞台を一時的に暗くして場面を変えること。

問一　二重傍線の部分a「イッショ」・b「ハンバイ」・c「サソ」・d「カンペキ」・e「訪」のカタカナは漢字で、漢字はその読みをひらがなで書け。（楷書（かいしょ）ではっきり大きく書くこと。）

問二　A ・ B ・ C に入る言葉として最も適当なものを選び、それぞれ記号で書け。

ア　けれど　　イ　つまり　　ウ　そして　　エ　だから

問三　傍線の部分①「竹のように」のような表現技法を何というか。次から適当なものを選び、記号で書け。

ア　直喩　　イ　隠喩　　ウ　反復　　エ　体言止め

問四　傍線の部分②「いままで感じたことのないようなよろこび」をアンノが感じていたのはなぜか。簡潔に書け。

問五　傍線の部分③「『だるまさんがころんだ』のように動きを止めつづけた」とあるが、アンノたちの連帯が最も表れた一文を抜き出し、初めの三字を書け。

問六　傍線の部分④「ふしぎな錯覚」とあるが、アンノはどのように錯覚したのか。**適当でないもの**を一つ選び、記号で書け。

ア　立ちどまった自分たちを見つづけている観客の視線に、今までには向けられたことのない熱気がふくまれているような気がした。
イ　自分たちの体をうまく動かせていないのに、照明が輝き、音楽が鳴りつづけていたので、うまく踊れているような気がした。
ウ　動きを止めることに集中しているいまという瞬間が引きのばされて、まるで永遠のなかにいるかのような気がした。
エ　手を握り合って静止する自分たちのシルエットが一体になって、このうえなく美しいかたちを作っているような気がした。

問七　傍線の部分⑤「だけど踊っているかもしれない」とあるが、アンノがそのように感じたのはなぜか。二十五字以内で書け。

問八　傍線の部分⑥「アケミ先生の言葉」はどこからどこまでか。初めと終わりの三字を書け。

問九　傍線の部分⑦「さっと冷えていくような気がした」とあるが、その理由として最も適当なものを選び、記号で書け。

ア　母親たちに楽屋に引き戻されたことで、この後アケミ先生に激しく怒られることが予想されたから。

イ　口々にあれこれ言い合う母親たちの様子を見て、モリちゃんが怒ったような顔でだまっていたから。

ウ　理不尽さにも耐えて頑張る娘を応援してきたモリちゃんのお母さんの想いを裏切ったことに気づいたから。

エ　ライトがあたり、音楽が鳴り響いていた舞台の興奮から解放されたことで、落ち着きを取り戻したから。

三

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

（設問の都合上、文章には改変した箇所がある。なお、字数に制限のある設問の場合、句読点・記号は一字として数えること。）

【文章Ⅰ（原文）】

今は昔、※1円融院の御時、※2内裏焼けにければ、※3後院になんおはしましける。殿上の台盤に人々あまた着きて、物食ひけるに、蔵人貞高台盤に額を当ててねぶり入りて、いびきをするなめりと思ふに、①ややしばしになれば、あやしと思ふ程に、台盤に額を当てて喉をくつくつと、くつめくやうに鳴らせば、※4小野宮大臣殿、いまだ頭中将にておはしけるが、※5主殿司に、「その式部丞の寝様こそ心得ね。それ起せ」とのたまひければ、主殿司寄りて起すに、すくみたるやうにて動かず。あやしさにかい探りて、「はや死に給ひにたり。いみじきわざかな」といふを聞きて、ありとある殿上人、蔵人、物も覚えず、物恐ろしかりければ、やがて向きたる方ざまにみな走り散る。

頭中将、「さりとてあるべき事ならず。これ、※6諸司の下部召してかき出でよ」と行ひ給ふ。②「いづ方の※7陣よりか出すべき」と申せば、「東の陣より出すべきなり」とのたまふaを聞きて、内の人ある限り、東の陣に、「かく出で行くを見ん」とてつどひ集りたる程に、違へて、［Ⅰ］の陣より殿上の畳ながらかき出でて出でぬれば、人々も見ずなりぬ。陣の口bかき出づる程に、父の※8三位来て、迎へ取りて去りぬ。

「かしこく、③人々に見あはずなりぬるものかな」となん人々いひける。

さて廿日ばかりありて、頭中将の夢に、④ありしやうにて、いみじう泣きて寄りて物をいふ。聞けば、「いとうれしく、おのれが死の恥を隠させ給ひたる事は世々に忘れ申すまじ。はかりごちて［Ⅰ］より出させ給はざらましかば、多くの人に面をこそは見えて、死の恥にて候はましか」とて、泣く泣く手を摺りて悦ぶとなん夢に見えたりける。

【文章Ⅱ（現代語訳）】

今は昔、円融天皇の御時に内裏が焼けてしまったので、帝は譲位後に住むはずの御所においでになった。殿上の間の食卓に大勢の人々が集まって食事をしていた時、蔵人貞高が、食卓に額をあてて眠り込み、いびきをかいているように見えたが、［A］、変だと思ってい

ると、食卓に額をあて、喉をくっくっと鳴らすようにした。そこで小野宮大臣殿が、まだ頭中将でおられたが、主殿司に、「その式部丞（しきぶのじょう）の寝ざまはどうもおかしい。起してみよ」とおっしゃったので、主殿司が寄って起すと、体が固くすくんだようで動かない。いぶかしく思って探ってみて、「もはや死んでしまわれている。これはえらいことです」と言うのを聞いて、居合せた殿上人、蔵人たちはみな呆然（ぼうぜん）としてしまい、けがれを嫌って、そのまま思い思いの方角に走り散った。

頭中将は、「かといってこのままにしておくわけにもいかぬ。これを役所の下部たちを呼び集めてかつぎ出せ」と指図される。「どちらの陣から出したらよいでしょうか」と言うと、「東の陣から出すがよい」と申された。それを聞いて御所内の人は残らず、東の陣からかつぎ出されて行くのを見ようと、東の陣に集まっている時に、反対に［ I ］の陣から、殿上の間の薄縁（うすべり）（むしろ、ござなど）に包んだままかつぎ出してしまったので、人々も見ずに終った。陣の入口をかついで出る時に、貞高の父の三位が来て、迎え取って帰った。「まんまと他人の目にさらさずにすませたものだ」と人々は言い合った。

さてそれから二十日ばかりたって、頭中将の夢に、故人が［ B ］涙を流しながら近寄って来て何か言う。聞くと、「まことにうれしく、私の死の恥をお隠しくださったことは、いつまでも忘れはいたしませぬ。謀（はか）り事をして［ I ］から出してくださらなかったなら、大勢の人に顔を見られて、死に恥をさらすところでした」と言って泣く泣く手をすって喜んだと、夢に見えたのであった。

【文章Ⅲ（月報27・清水義範）】

少し真面目なことを言えば、『宇治拾遺物語』というような昔の説話集を読む楽しみは、収められている話が今の私たちにも面白いかどうかを吟味するところにある。

つまり、昔の人にはその話がとても面白く思えたのだ。霊異譚（りょういたん）も、童話も、好色話も、英雄譚も、法験説話も、往生譚も、これが実によくできた面白い話だと思われたので、ここに収録されているのだ。

そういう話を、現代人である我々がどれだけ面白いと思えるのか。今となっては、何が言いたいのかさっぱりわからず、どの話もピンとこないのかどうか。

実は、『宇治拾遺物語』に収められている話の八割ぐらいは、現代人にも一応面白く読めるのである。少なくとも、⑤どこがどのように面白いのか理解できる。

お寺の稚児（ちご）が、ぼた餅（もち）を作る夜に空寝して、呼ばれたが返事をしそびれて、かなりたってから、「はい」と返事をする話には、現代人もニコニコしてしまうのだ。

昔と今の、人の面白がることの共通性が感じられて、実はそのことが、こういう文学の一番面白く、有意義なところなのである。人の心理が基本的には不変であるからこそ、古典文学の価値はどんなに時代が変わろうが減じることがないのだ。

（『新編日本古典文学全集50　宇治拾遺物語』による）

※1　円融院 —— 第六十四代円融天皇（九五九～九九一）。
※2　内裏 —— 天皇の住まい。
※3　後院 —— 天皇が退位後に住む御所。ここは臨時の居所。
※4　小野宮大臣殿 —— 藤原実資（さねすけ）（九五七～一〇四六）。天元四年、二十五歳のとき頭中将（天皇の側近）であった。
※5　主殿司 —— 殿上の間の清掃、光熱を管轄する主殿寮の職員。
※6　諸司の下部 —— 役所の下働きの者たち。
※7　陣 —— 内裏の警備、護衛にあたる兵士の詰所。
※8　三位 —— 貴族の地位や身分の序列の第三番目。

問一　二重傍線の部分ａ「のたまふ」・ｂ「かき出づる」をすべて現代仮名遣い（ひらがな）に直して書け。

問二　［Ⅰ］に入れるのに適当な言葉を、漢字一字で書け。

問三　傍線の部分①「ややしばしになれば」の現代語訳として、［A］に入れるのに最も適当なものを選び、記号で書け。

ア　いつもと同じようなので

イ　ほんの少しの時間なので
ウ　かなり長く続くので
エ　たびたび起こることなので

問四　傍線の部分②「いづ方の陣よりか出すべき」について、係り結びの「係りの助詞」と「結びの部分」をそれぞれ一単語で抜き出して書け。

問五　傍線の部分③「人々に見あはず」とあるが、頭中将が貞高の遺体を人目にさらさなかった意図がわかる部分を【文章Ⅰ】より十五字で抜き出して書け。

問六　傍線の部分④「ありしやうにて」の意味として、［　B　］に入れるのに最も適当なものを選び、記号で書け。

ア　いつもの調子で
イ　疲れた様子で
ウ　懐かしげな表情で
エ　生前の姿で

問七　傍線の部分⑤「どこがどのように面白いのか」とあるが、昔の人はこの話のどのような点を最も「面白い」と思ったのか。主語を明らかにして五十字以内で書け。

このページは空白です。

令和八年度　仁愛女子高等学校入学試験問題　国語　解答用紙

受験番号

一

問一
a
b
c

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

二

問一
a
b
c
d
e

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八
〜

問九

三

問一
a
b

問二

問三

問四
係りの助詞
結びの部分

問五

問六

問七